

二百三高地の激戦（日露戦争）

当初、旅順攻撃を主体にした、第三軍に対して激励の勅語が下された。総攻撃を前にして特別予備隊を編成し、敵味方を識別するために白樺をかけて、旅順要塞へ突入する事を目的とした攻撃を行ったが、決死の攻撃も砲台に突入しながら撃退された。

乃木司令官は、いままでの正面攻撃を一時中止して主力攻撃を二百三高地に集中し、当時の二十八センチ砲での攻撃を繰り返し、二百三高地の一部を占領したが、夜中にロシア軍の逆襲に合い奪還されるなど、犠牲が続出した。

一時、乃木第三軍司令官の指揮を、総参謀長の児玉源太郎が代わるなど、この第三回の旅順総攻撃での死傷者は約一万七百名を数えた。

当時の従軍記者の、描写では

敵味方の大小弾丸は数限りなく撃ちに撃ち続けられたることとて、二百三高地は元来素直なる双子山なりしに、双子の上に幾百なる山が出来てその形一変した。

味方の屍の上に敵屍が重なり、その上に味方の屍が連なり、敵味方の屍が五重になって、赤ケツトを敷き詰めた様なりしより、七日目以後に再び従前の素直なる形に返つたように見えた。と記している。

この戦いで、福嶋出身の何人も戦死し、友人多数の善意によって、従来までになかった大きな墓碑を建てて、その苦勞と忠節を讃えた。

